

---

# Zabieni Matka ~「母」殺しの少年~

なんとなく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Zabieni Matkaj 「母」殺しの少年

### 【Zコード】

N7888Z

### 【作者名】

なんとなく

### 【あらすじ】

とある村に住むウチダ　トモキは、雷に直撃して記憶喪失になつていた。

それから一年後、トモキは記憶喪失だったことを忘れるぐらいに回復した。ある日の学校帰り、敵がこの村を攻めてくるのを知ったトモキは敵が来る前に村の人たちを避難させようと走ったのだった。

## 名も無き始まり

小鳥のさえずる声が聞こえる。窓のカーテンから朝の光が漏れている。

今日も気持ちのいい朝が来た。俺はいつものように、ベッドから這い出てカーテンを開けた。朝の光が

俺の眠っていた意識を徐々に目覚めさせてくれた。  
いつものように顔を洗つていつものように着替え、いつものように朝飯を食べる。準備完了だ。

靴を履いて外に出る。すると、毎日必ず俺を呼ぶ声がする。

「おはよートモキ君」

朝一番に顔を見せにくるはシノハラ ユウコ。一年前からお世話になつてゐる。ユウコは本当に親切（おせつかい？）で、いろいろな事に心配をかけてくる。まあそうしてくれたおかげで、今俺がこうしていられるんだけどな。

「おはよー、トモキ。ユウコ」

「おはよー、エリック」

次にくるのはエリック トレバー。エリックにも一年前からお世話になつてゐる。いつもユウコに負けないぐらに優しくて、頼りになる。

二人とも、ここに来たばかりのときから何度も俺を助けてくれた。この二人がいなかつたら俺は存在しなかつただろう。

「トモキ君？ 何か考え方？ 相談乗るよ？」

小鳥が首をかしげるように、かわいらしい仕草でユウコが話しかけてくる。

「いや。なんでもないよ

「そう……何かあつたら相談してね

なぜか残念そうに念をおす。まったく、おせつかいにも程あるんじゃないかな？」

「コウロ。おせつかいにも程があるよ。今トモキは自立しようとてるんだから」

ヒリックが、俺が思つたことを言つてくれた。

「…そうだね！トモキは自立しなくちゃいけないんだもんね！私も控えなくちゃ！」

俺は多少おせつかいでも、そのほうがありがたいんだけどな。いや、その甘えがダメなんだ。自立しないと…。

「そういえば、トモキって今回のテストビのくらいだったの？」「エリックがこの前のテストのことを聞いてきた。俺が答えようとした瞬間、

「す」「こ」よヒリック！もつすぐで私が抜かされるといひだつたんだ  
「…」

コウロに先を越された。だからビリッて事はないが。

「あと一歩差、学年一位だつた

「へえ。あの勉強とおせつかいのために生まれたコウロと並ぶまでになつたとはねえ

「ほんと、あのときは自分が誰なのかもわからなかつたのに。信じられない！」

「コウロのおせつかいのせいだよ。トモキは飲み込みがいいからね

「いや、俺は盗みが上手なんだよ」

軽く一人笑いをとる。本当に、あのときじや信じられない光景だ。

ある日、俺は田代見めた。まったく俺の知らないところだ。なんか体中がズキズキと痛いし頭はぐらぐらする。待てよ……そもそも俺は誰なんだ？なんでここにいるんだ？

答えの出ない謎に頭を抱えていたとき、

「やあ。田覓めたかい？ウチダ トモキ君」

後ろから、たぶん俺の名前を呼ぶ声がした。

「僕はエリック トレバー。体大丈夫？」

振り返るとエリックと名乗る少年が立っていた。

「ああ、大丈夫だと思つ。ところで、俺はウチダ トモキって言つのか？」

「うん、そうだよ」

「そうか。俺はウチダ トモキなのか。言われてみれば、なんかしつくりくるものがある。そしてこの少年がエリック……よし、覚えたぞ。」

「もしかして、記憶がないのかい？」

「ああ。まったく思い出せないんだ。俺が誰なのか、何でここにいるのか」

「そりゃあ」

一旦エリックが言葉を止めた。エリックの顔を見ると、なにか考えているように見えた。気のせいだとは思うが。

「トモキは雷に直撃したんだよ」

「おうえ？！雷？！」

「そりゃ。ここのところ嵐続きだったからね……運が悪かつたんだよ」  
雷、嵐……待てよ、何で俺がこの単語を知ってるんだ？……そうか。たぶん俺は、自分に関する記憶だけが飛んでるのか。自分の疑問を自分で解決した。

「よく生きていられたね」

エリックが感心したように俺を見る。それはこっちが言いたいセリフだよ。

すると、ドアからノックする音が聞こえた。

「…入つてもいい？」

女の子の声だ。しかも、なかなかの美声だった。

「別に大丈夫だよ。入つて」

エリックが促す。ガチャッとドアが開き、黒髪ロングヘアの女の子が恐る恐る入ってきた。

「容態はどうなの？」

「体は大丈夫。だけど、記憶喪失みたいなんだ」

「そんな…」

今にも泣き出しそうな目で俺を見た。

「「…ごめんなさい…」

「は…はあ」

突然、謝れてしまった。

「私がもっと早く気づいていればこうならなかつたんですけど…本当に「めんなさい！」

女の子が90度以上に頭を下げた。床を見てみると、ぽたぽたと涙が落ちていた。

記憶喪失って時間に関係するのか？ととりあえず、俺が許してあげないといけないらしい。

「えっと…大丈夫だよ。君のせいって訳でもないし、記憶喪失と言つても自分のことだけが分からぬだけで、生活にはたぶん問題ないと思う」

ほんとに問題ないのかよ。なんて思つたがそこは考えないとする。

「ほ…ほんとですか？」

女の子が顔を上げて俺を見つめる。

「ああ」

「…ありがとうございます」

少しだけ顔が明るくなつた。

「でも、それだけでは満足できません。罪滅ぼしと言つてはあれなんですが、私が生活をサポートするつてのはどうですか？」

別にこの子は何もしないのに。まあ、この先何が起きるか分からぬし、悪くはない話だ。

「ああ、わかった。助かるよ」

俺は快くその提案を承諾した。

「ありがとウチダ…えっと、私はシノハラ ゴウゴト…います」

「俺はウチダ テモキ。よろしく」

自己紹介を終え、俺はこの村を案内されに、ゴウゴトヒリックに連れて行かれた。

学校が終わり、いつものように三人で帰る…のだったが、ゴウゴトが「用事があるから」と言って先に帰ってしまった。

ということで、今日はヒリックと一人だけで帰った。帰り道の途中に見晴らしの良い丘がある。俺たちは毎日ここを通る。そこで少しだけ、愚痴を言い合つたり秘密話を話したりしている。

「…静かだ」

俺がぽつりとつぶやく。

「……」

しかし、ヒリックは反応してくれなかつた。ヒリックは遠く、遠くを見ているようだつた。どうしたものだらうか。いや、こういうことは珍しいことではない。ボーッとしていたり、ぶつぶつと誰かと話をしているようなときもある。

でも、今日は少ししがう。いつもより深刻な顔をしている。

「ヒリック? どうした? さつきからずっと同じところばっか見てるけど」

ヒリックが見ている所に目を凝らしても何も見えない。さすがに俺も気になつてしまつた。

「トモキ…今すぐ逃げるんだ」

ヒリックがやつと口を動かした。しかし、その一言は俺には理解できなかつた。

「どうしたんだよヒリック」

「…これから早く逃げるんだ!」

あの穏やかなエリックが血相を変えた。正直、俺はビビッた。

「M<sub>N</sub><sup>エヌ</sup>がこっちに向かってきてるんだ！早く学校のほうへ逃げろ！」

「M<sub>N</sub>…って、おい！マジかよ！」

M<sub>N</sub>。モビル・ズブラー二の略称。たしか8m以上の機動兵器のことについてたはず。

しかし、どんなに眺めても俺は見つけられなかつた。

「今どこら辺にいるんだ？」

「たぶん、20km先に8機いるとと思う。あれは…バルサのだ」

「バルサってあのバルサ王国か」

バルサ王国。この村の西側に広がる大国。今、東側にあるセルジオ国と戦争中だ。

それにもすばらしい視力だ。俺もその化け物並みの視力を持つてたらなあ…っとそんなことを考えている場合じゃない。とりあえず敵はこちらへ向かってくるとして、なぜここを通るんだ？セルジオに攻めて来るにしては少なすぎるし、ここら辺には拠点となる都市はないはずだ。やっぱり矛先はここなのか？

「それにしても、何でここなんかに攻めてくるんだ？」

頭の中に浮かんだ疑問をエリックにぶつけてみる。

「わからない。それより避難することが先決だ。トモキは先に避難して。村に残ってる人は、僕が呼んでくるから」

OK、分かった…って言える訳がないだろう！俺だけ避難するなんてごめんだ。

「いや、俺も行くよ」

「だめだ！危険すぎる！」

強く否定されてしまった。なぜここまで否定するのだろうか。俺にはわからなかつた。

「そうしたらエリックも危険じゃないか

「それはそうだけど…」

エリックが口ごもる。よし！今がチャンスだ！

「俺、いつかこの村の人たちの力になりたいと思つてたんだ。記憶

喪失だつた俺を、この村の人たちは優しく接してくれた。俺はその恩返しがしたいんだよ」

本当にこんなことが恩返しに繋がるかどうかはわからなかつた。しかし、「恩返しをしたい」という気持ちには変わりがなかつた。

「…こんなところでもたもたしてないで早く行こうー。」

エリックの返事を待たずに、俺は村の方へ走つた。

「あつ！待つてよ！」

エリックが俺の後ろについてくる。

「絶対に無理はしないよ！」

エリックが念を押す。

「お互いにな！」

振り向かず了解の返事をする。絶対に誰も死なせない。俺は心の中で誓つた。

## おも書き始まつ（後書き）

初投稿です。この先続けていくことができるかどうか心配ですがよろしくお願いします。

次話投稿まではかなり長くなると思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7888z/>

Zabieni Matka～「母」殺しの少年～

2011年12月25日13時49分発行